刻利

十六利勘略緣起

遠
2.048

春

十六利勘畧縁起序

如是我聞一時佛在世話狂言の夏芝居ハ故人松緑羅漢わ拵し牛頭旃檀乃木琴をなりして天竺得備が悪をとらし無熱池の水をくぶやく孤平次ハ逝霊ハ善ゆをあ牡丹燈籠の光明をてし傳灯録のわんてらをとてもして羅漢墓ハ見物をさしもせし今ハ昔ハありたたとしきし羅漢の形容ハ又ふ錫杖をはして猛虎をふ鉄鉢をさげ霊龍をとゞめ佛をもゑ

いでんあり鬼ハ女ハたゝのるとさらくりの水がくらあり眉間わ雲をいです手妻あり坐をあり卧あり耳にはきくさゝやくあり手をとらく笑ふあり あさのも人間苦楽ハ作業ハ似さう荷足猪牙舟さんや紅羅漢茶の

乘金剛経の説なり。佛説生経巻第一ゑ收めり。偏祖右肩の片腕ゑ命とゝゑ字いたがゝ白無垢ぬいでゑ色さうんせ三世因果れ喜怒れゑ哀楽の山あゝゝ禪家蒙求ゝいけどゝ教外別傳不立文珠乃獅子十六羅漢ゑ紙屑材のたゝゑ二間坐敷乃ちぐひ棚あけくゝゑれた呉道子が筆意をうゝ兆殿司が画法ゑ繪ゝゝゝ揖者悟ゝゝ徳と利勘とゑめゝ小冊なり。さてまゝこつぎ翻譯ゑ梵語ゑ摩訶とゝゝゝを唐ゑ翻して大の字じやゝ唐れ三藏圓法師ゝゝゝ木のゝゝと木佛の黒焼と調合たる悟道の効薬円霞ときろ

てゝ上に地ゝゝゝ

十六利勘目録

一 欲連損者
二 我慢損者
三 借越損者
四 奢羅損者
五 貪須盧損者
六 通損者
七 降那損者
八 多辨損者
九 朝寢損者
十 食乱損者
十一 煩惱損者
十二 小利大損者
十三 因果損者
十四 短氣損者
十五 金那羅損者
十六 迷損者

欲連損者

我慢損者

そのつぎのぎまんハぎまんそん
しゃとまらたてまろり
がまんのをゆ[illegible]
さのどせんさうの
てつぞうら[illegible]を
いざーてかぞやきゅーて
あてさまみ「それ
ぎまんある
くハどくの
くひ
あハ
せも
[illegible]
ぎ
とら
を
そうに
ゆーてすきをいれてそひ
ゑびやをぞきをからどとがりくとろてきせ
とのつハきろのとくたやらろをよくこび
「ゑてさ仕そのきをのびこくハできるひとい
できわでとうもるりんぎのんでさぞのとろひ
てくとりきをとうそひとのきふのとらてくを

てりやき
大ぎゑばき焼

▼「ゑびまるのぎまんハうでを
くぐく」これらに
とくのゆくこと
ひくろもの
とにくふ
ぎまんする八
おりさふ
そんしゃ
すてきふ
そんしゃと
いまり
なまふ

あくまのうらうあつのうらやうつぷいとせんざ
ゑまきひとものうくくをーそくちのゆけどを
ゑんとも[illegible]
わまれとともゆゑにつのハ
大きくくもをうをて
やりくいのち一ゑを
ひろふくびひ
これ[illegible]
ぎまんそん
じゃあり
「又さーようの
ぎまんハつゑを
つくぞにあるそ
ちきゑけどをて
「ゑびひとの
ぎまんハゑくちを
しとありくふ
でろくふせ「ゆせ[illegible]ぎまんハ
つくひものにきをまろ
「ゆきろぞうのがまんハ
三日でろくもてのしゆに
ものをいろに「ゆうこうにんの
がまんハそゆをーそひとで
ぐろ「くびつぴきのぎまんハ
ゑうをもろひき▼

借越損者

そのつぎのつるんいかりこと
そんとやとまりしちまる
「のめをうりこんくいるちゑ
うあうてあろうこをらひ
ちふくらをいふゆふかう
こんのちゑとらん「ちゑもの
かひはつくしきいくぐつ
ゆうごけと名をつけてちゑくを
むーやうとうりちと」いつそん
さきんはやうのよとてうかうぞうを
ゆそさうのやにめそこをくんせ
まくんはやとそん」めのいまと
うるぎうにそんをうけ
「うりてんのこうりていくこひ
ちやくせんのめこうこうして
ぜんとかーとゆうぞめ
うこのめんくそくてん
でもうくらぬかめくんちゑく
すんこひ「てんぷらのうきを
ごーを」こてんはあぶらのゆを
をあぶ〜「うもあんぞんの
うきぐーにんはあまぐまのうく
あうこぐんこかーそれもぎまぞと
こーこううてもゆーとうけうけず
ちこゆ八男ハうまでもこんがうこと
ちこれぬくこうこうこ

奢羅損者

そのつぎのつるんハ
おごらゆそんドやと
けうーーーかる
羅ぶん
ふきう
ゆうふ
きう
ぎろて
でる
をんあ
ゆどんこたまひてんゆくまの
さきこうくあーのぎりくまで
これがいくうゆまぎゆうくこと
こうぞんふゆそこそこれぞんん
ちんーゆうぶゆてれぞんぶぐと
ゆうををあげてゆきれこるん
「ゆうぐうのゆこんゆんぐうう
のくーううんがうのあくまぞんさんご
ぎのをぞうちこうふんんビ」
「きこうゆのぞうちんさうまのもに
こうこうどうけぞ「ゆやうをぎゆをのゆに
いめんさんまのひのふゆをうけぞ「こんちぎんのぎうん」

「をんぞ
こうきこぞ
めこそも
たここそこに
ゆうひ
ふうこぞ
ゆらよ
めんん
まうこの
きかこ
ぞるふ
ゆるこ
ぎうる
ふこ
ぎうこ
ぎう

貧須盧損者

山東
京山製
十三味
水晶粉
「京山製郊」

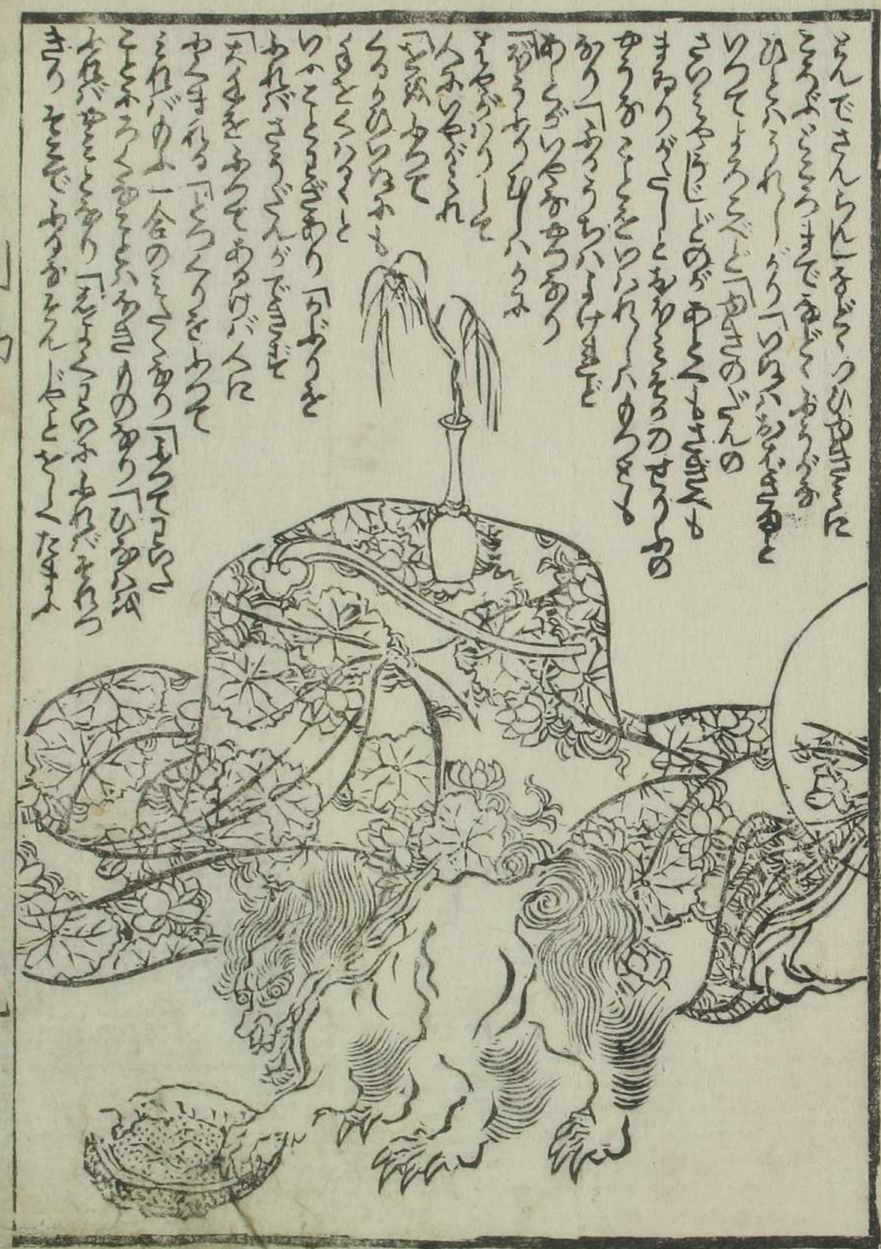
通撹者

降那撰者

そのつぎのろうんハふるあるそんじやとまるこ

「そもく
あることのふことにてくあるとハ
まれあり「十日あくにたるあんとく
ふるあるハくべつそれもつづそ
ありもぎれバあるごのそられの
からさのようくのとそんハあれ
どもさくもくあく「あるくあ
あハくりぎをぬらー「ごびの
あるにハ川どうあり「あくふる
ゆきくあるゆきハがとふあて

醒齋京傳隨筆
骨董集 大本
ふるきものの
古昏をあまさくして
えんぐゆぐくーき
古圖古画入
初へん二冊
二へん二冊
三へん四へん
毎年
二冊つ
刊行



とんでさんらんをどくひやきに
ところどころまでをどくあるくあ
ひとハうれーくう「いらハるれきあと
いろてよろこべと「ひさのごんの
さるくふらに」どのがやくもさきく
まるりがくーとあるくそのさるりあの
ゆるかくをいれーハあるとく
あり「あるうちハーまけまど
ゆくぶいるかあるのり
「あるうちハーそ
くあいるぶくれ
「ごぶ あて
くるうあいるかも
るをくいるくと
いのくるぎあり「ひあるを
あれバさるぶんができまど
「大るをあるそあるけバくに
ゆくまれる「ところくをあて
それバあり一合のくくあり「まてこらさ
くとふるくあるくるきりのあり「ひあるか
ふれバかくとあり「そくくるのふあれバそれる
きりくそくあるそんじやとくなまく

多辨撰者

朝寝者損者

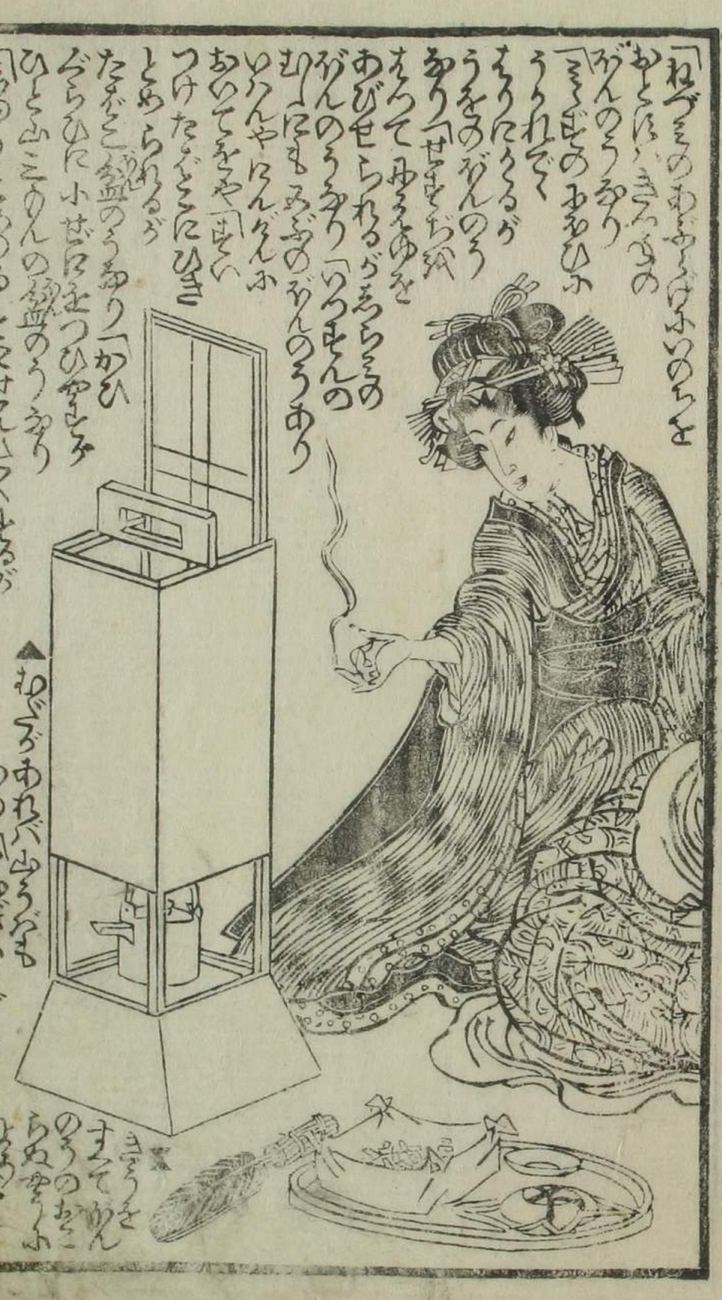
食乱損者

煩惱損者

「あれぞろ だんまりでもゆられまへのおらぶあるまの
びんづるのめりやをでぐりまーやう
そのつぎのあろんいがんのう
「ヨキまてい・ちりけさんそのきう ぢろが うてらら
ぐんしゃとまりこまる「むきあ
たろわく ごらせあろ・あろの日ぶし ゆきのよろも
たろぐんのうぐんのうがぐさいめ
ぢ和とかんいかくされぐ おりよりもりへぐそ
あわ・あろぐるくんにせこられて・くまぐあさころ
あわくまちろらむろのえやるぎ
ことも あく・ぐそこそ あのさきろうのあず・
あどくいんどもがんのういそれだろうに
ふららけこれて「ろーやものりもひ・
あふんあもぐむやそうのがんのうあり
「ヨきとくとんとくのがんのうへそろぐんの
むゆもあげてうぐふべくんぐ「ヨんき
えろくこのがんのうへ
皿やーきのさら
ゆもいろぐ
「いとう
うろのがん
のうのいぬへ
うてぐも
さらぐ
「ゆけのくきぐす
ぐそがいろまで
ぐきのいろまでも
ゆゆあのやこのがんのうあり

「これたらをと
まろうりのこめや
あそれものがせ
鳴の めこの
ゆぎれで
やを
ぬぐひ
ひと火
あとまも
ア そん
ぐそ

「ねづこのむゆくけふいのちを
ゆとにはきろくまの
がんのうあり
「ここぐのあるひふ
うろれぐで
ろうにろくるが
うをのがんのう
あり「せまをちぐ
ゆろて みろゆを
あびせられるがろらこの
がんのうあり「いろもんの
むにはもみぶのがんのうあり
いろんやにんぐんふ
あのてをや「ぐい
つけたぐこにひき
とあらあるが
たぐこ盆のうあり「かひ
ぐらひに小ぜにをつひやとみ
ひとふこのんの盆のうあり
「あやうとあのるぐに せんさくむるが
よくあろがんのうあり「たぐぎろうのがんさをを
うけとうとまちぐてままものを文かくれるが
七月の盆のうあり「がんのうあれば むぐあり▲



▲ぬぐあれば ふうぐも
あり「ゆぎぐ ぐどう
へどぐ せろあのいろ
ろくぐがんのうぐそんよ
ゆどたころのゆまひた▼

きうを
すそ ぐん
のうのおを
らぬゆふ
ようぐう
せこと
をく

小利大損者

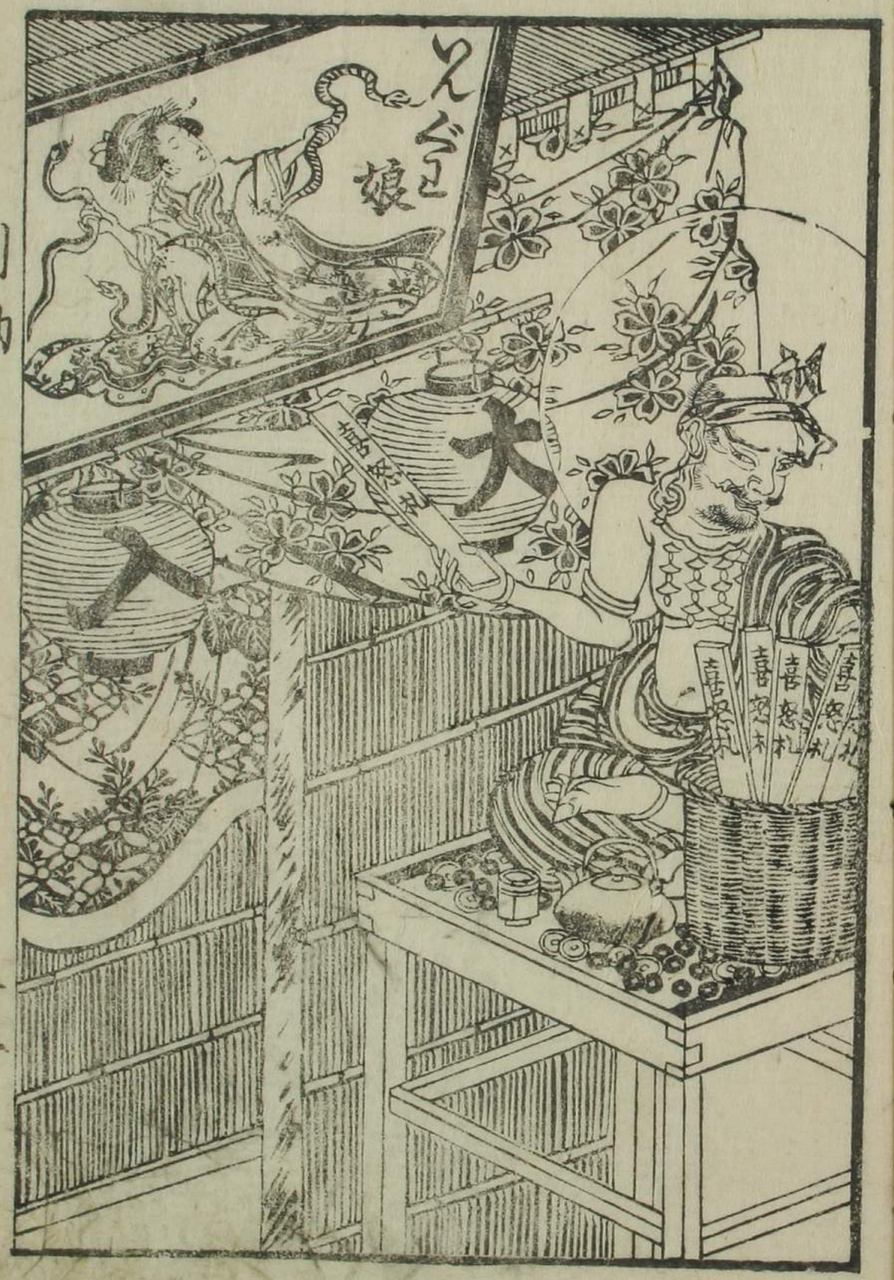
そのつぎのもろんハ小利だいそんしやと
まうしまの「せうりをそんとそだいそんを
まるくありこれを一文をもつてこの酒そんしや
ともまうしかり「だいやくそくをたつてかつぷに
ひられ「なけなしにゆきてろんぐにいでやいの
「のりあひぶねでかまうをひにこまり「かせをめで
まるあをあをと「百ゑ千のうりをでたちまきをを
ちるとこひ「こゑのこれせうやとぐのそんしやの
うちありといまーめくまふ

「猩々みてハにーやう橋
あくまけ
ちやぶけてハたどんぶり
こせハ四いのまぐろぶそで
ありふりけまーと
ひやうぞんく
「でんぐくにゑ文の
からーのたまに
ぼらーどろく
ぜにふもどろ
ぜにハもどろ

因果損者

そのつぎのもろんハいんぐを
そんしやとまうしまする
「あくのむくのハ鬼のむくひろ
くやーやるいんぐをくるまをび
ひらめハあやをあらやさむくひかり
あまさろこらをきらふゆも
あるあーんかやのいんぐらの
いんぐとをれさ
どうあり

「ゆろあやぐいぬとあり」をのかきまハ
七ぐんめのきりにあるぶりごろ」とあるこれゆくぜんのいん
ぐをたんぐろん
あやまうちにハあくでさざかくをぷんと
やしハてろぷう「あめのいんぐをあう」されば
ちにまてもあきこころをあるべくくん
そんしやと
いまーわ
ゆふ



短氣者損者
その
つぎの
ろうにいたんきそんじゃと
まらしまうふるぞうぐやと
げんじゃまひてゆまねくかん
ちゃくのあゆーぐうをさのじ
しまの「はろうろんさるのきんぎよ
ゆふうふをろうくこんしゃくゆち
ありくるが粉びつぶがろきふづ
ゆひぜふぐつきてるようこるろう

ぜんろひろあろのとてよーゆうこでことを
いびえこちきのろいてーゆとふまうぞう
もまりてゆぶとてーゆーゆびひとこのふ
かあいろことりひべちゃくちゃくと
ちゃびりてつのにちぞげんこうとりう
てのーゆあゆんーゆくにてあろあふ
ぶびんをころてあげまびかあ
もちゃうんをあげりふりぐの
どころあどうぐとゆりくこふさ
ひでゆりぐーゆうぐろつが
れこのこんまでゆげちにてゆそゃ
ゆゆもゆげゆふるりのあれど
ふうあのうんーゆくいのまぐさまーび
ふうふーともにみのぐーてーてのーゆまろ
ひろんさゆふるどうぐ
こせふありあふせりこ
ぶれころてかあをぞう
のゆせびうあも
そこふありあふ
もうぞうちを
しろてあげ
ばれ
力
十四
さるいきもを
つぶーこれいう
ゆうをあふうふげんこうこ
ゆんくのうちでまくぶーこい
ゆのくふるどうぐをあげゆう

まのつぎ　あんがおれがいけどまちやうぐのゆーてあそもこれいうんにんろくぬとえそ
めくうくそどぬのそろくこくまつべてのしもきがつきこれはいもつともそさうせんづん
ゆんくろくぐうでうもめくあるどうぐあれべあとで代ぜんさえそらくらのひぶんハ
あるまのくのこ「ろうんさみこれをきくあるやど
代ぜんさえくまこもあくのくでもきまろも
とのくるべ「ろくつんといふうりえく
てのーもあんどんとあげのぐもべ「かゑハ
ところくりをあげやゆる「ろうんさるハ妹を
ごーてふぐあつくり「ろくトまろくり
そふやもくろりゆられてハ妹ゆつける
まももる「一ツ百ニ文ニ文あんどん
「一ツ十ゆ文ところくり「サアくし」
そのあとをろくーくーとのくまべ
「ふくふーてくあくり考ぐこのにあげ
ちしやうくうんーやくのおきまくさ
おぐん「ろうんさるゆ妹をまくこ
てろど八ムさんふ百らちあん
サア代ぜんをうけとらやとのくまべ
「ふうふハメぐろをきこのてぐゆやと
ふりろぐくーことぐもふりろう
「ときにとろんさるふるをたくき

金奈羅損者

そのつぎのこちらんハきんゆらそんどやと
まもなる「それゆんぐんのありくるハ
ゆやうぐきをさをにことゆくん「けゆまあ
たろあぐりハふのあどきとあるぐごく
ふうもんうゆぐれーてくろあぐくる
ひとうぎりと
いふゆんぐーを
うゆられ
ひくに
ゆるぬ
ことぐ
でき
その
ときゆ
あり
らんに
して
けちつけべ
きやう
しゆめ
ゆうふあき
けらま

エハふくくとせき
ふちひーそ
のくまろく
「それつらく
ちんんこるに
ちゆん紙
びつのあに
ぐらハくりん
のくらに
ゆくろく
ぎんのの
ふぐこゆ
ちどろ
くもぐきくもう紙
うあけのそこゆけてまぐゆられど
ひとーくらり貝ハさーこゆんーやくどこえすり
くらり四ーきこれきんぐうのちちまゆれ四十二の
ゆゆぐくもくこるちに
アやうぐくもとぐきくくこぐゆのこれくこのハ列馬ゆんここ
もゆゆるりつちべつほのくこのくこふこそ
ゆりりくこそこのゆけくこひーやくハゆゆうれの
ゆんぐ
ふつのくそれこぐんふくれこまざうゆのちく
ゆこーこんんやくのけゆハムくんゆ百十ちゆ
しやちこゆ中のくちんしやナントくうきふこんくをいまーゆこまゆ
あすまゆハ
ゆにとこふ
こちふきんこちふと
うどろね紙ゆをこ
うけられてそん
どのハれれ
さきのふくう
ものやうく
りてこも
たてこぐーの
ちこぐゆとゆう
こちやりきえこひに
ちられてきん
のゆひまり
ゆーにつのふく
をつぐれこと鑑
ゆにこまのくう
「こくくんハゆこをひげ
してたろゆくを
ちうにこちぐくしゆーるちちね
ゆちこんどやと助ちんーなまふ

豊國画

山東京傳戯作

迷者損者

京傳店 江戸京橋銀座二丁目

偽書 晉米